

学びの仕組み（人生学 第8回）

高 橋 清 隆

はじめに

今回は、夏目漱石の『夢十夜』の中の「第三夜」について取り上げました。それは「こんな夢を見た。」から始まり、六歳になる自分の子を背負っているのですが、その子がいつの間にか目が不自由になっているのです。そして、大人のような言葉つきで、いろいろ語るのですが、仕舞いに、「御父（おとつ）さん、其の杉の根の所だつたね」「文化五年辰（たつ）年だらう」「御前（おまへ）がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」とその子は言い放ちます。そこで、主人公は「自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覚が、忽然として頭の中に起つた。おれは人殺しであつたんだと始めて気が附いた途端に、背中の子が急に石地蔵の様に重くなつた。」と感じて、この短編は結ばれています。

フィクションなので、その後、この父子はどうなったのかと思つても、仕方のないことだと思つていました。ところが、直接の続編ではありませんが、自分が前世で殺した人物が自分の子供として生まれてきた話に行き当たったので、そこから語り起こしたいと思います。

1 親不孝な長男

宜保愛子さんの著書『生まれ変わりの秘密』（講談社、1993年3月27日）を読んだのは、前回の原稿を書いてから半年ほど経ってからのことでしたが、内容的に「第三夜」のあとを継ぐものとしてふさわしい、と読みながら思いました。

それは、ある母親が、前世で殺した相手がその長男として生まれてきているという実話です。以下の引用で「私」となっているのは、その母親です。

四人の子供をみな同じように育ててきたのに、なんで長男だけが、いまこのように私を、いや私たち家族を震えあがらせているのでしょうか。

幼いときには、かわいらしい瞳で私を見あげて、私のスカートにまつわりついてきた息子なのに……。その息子を、私はいまは恐怖をもって待たなければならないとは、なんと不幸なことでしょう。

私は、息子が早く死んでくれればいい、とさえ思っています。それが、ほかの子供にとっても一番いいことなのです。長男が何かの事故で死んでくれたら、という恐ろしいことを、私たち夫婦は最近ただただ考えているのです。

長男が中学生の頃、なんの動機もなく、ふと家を出てから十年の年月が流れました。

初めてわが家へ戻ったとき、息子は家中の、お金に換えられそうな物ならなんでもわしづかみにして、もっていつてしまいました。それ以来、親に暴力をふるい、兄弟にも迷惑をかけっぱなし。私たちはどれだけひどい目にあわせられたか、わかりません。

あるときなど、これから絶対に真面目になるから、いまかかえている借金だけは返させてほしい、と泣きつかれ、家族の住んでいる家屋敷から土地まで売り払ってお金をつくり、返済させましたが、それは真っ赤な嘘でした。その後、私たちは、息子の目をのがれようとして、借家を次々と変えている始末です。

私の年齢は七十歳に満たないというのに、八十過ぎのよばよばの老婆としか見えないほど、やつれてしまいました。(292～294ページ)

このような子供を持った親は、自分のことを、不運だ不幸だと思うのではないのでしょうか。しかし、この話には続きがあるのです。

2 殺した相手がわが子として生まれる因果

さらに、宜保愛子さんの著書から引用を続けます。

私は、自分の息子からこんな目にあわされるのは、何か前世との関わり合いがあるのではないか、とずっと疑問に思ってきたのです。

私は同じ夢を、何百回何千回と見てきました。そして悩み続けているのです。

その夢の話を聞いていただきたいのです。

私はある川原に立っています。

若い男を追いかけて、ここまで来たような感じがするのは、何かその人と深い関わり合いがあったからではないかと思います。

夢のなかのその川原がいったいどこなのか、ある日とうとう、私はつきとめました。それは友人のもっていた一枚の写真を見たときのことです。

そこには、夢のなかに出てくるのと同じ川が写っているではありませんか。

川だけではなく。その川のそばに建っている民家までも、夢のなかの光景とまったく同じだったのです。(295ページ)

このあと、この母親は、その川原へ実際に行ってみるのですが、現世では一度も来たことがないのに、道の先がどうなっているかがわかったと書かれています。いわゆるデジャヴュ、既視感です。

じつは私の夢の最も恐ろしいところは、この川原に男の人がべったりとすわり、その男を追いつめた私が、彼を殺そうとしている場面なのです。

苦しそうな顔をして、私の顔を見上げたその男の顔は、ものすごい形相です。うらんでいるような目つきで、私の顔を見すえるのです。

ここまで来ると、私の夢はぱつと終わるのですが、こんな夢を見るたびに、私はしばらく布団の上にすわり、荒くなった呼吸を静めるのです。(中略)

ある日、息子が、いつものように迷惑をかけに、家へ帰ってきたことがありました。『いつもいつも、家族をこんなに困らせて、今日という今日は許さない』、私はそう思って、その日ばかりは息子を追いかけ回し、泣きながら息子の頭や肩を、まるで小さな子供を折檻するように、がむしゃらに叩き始めたのです。

そのとき、息子が私の顔をぎっとにらみつけました。

『あっ！』私は思わず、驚きの声をあげました。——あの男、いつも夢のなかに出てくるあの男の顔、私が殺そうとすると、私をにらみ返してくる、あの男の顔とそっくりだったのです。

となると、もしかしたら、私は自分の子供を、あるいは子供と似た男の人を、あの川原で殺したことがあるのだろうか。そのために、いま息子によって苦しめられているのでしょうか。

前世の関わり合いが原因だとしたら、私はどういうふうにすればいいのか、宜保さん、どうか教えてください（296～298ページ）

ここで、この母親は「私は自分の子供を、あるいは子供と似た男の人を、あの川原で殺したことがあるのだろうか。」と言っていますが、これはおそらく、そうではないと思います。生まれ変わると、顔かたちなどは違うものを選ぶことが多く、互いの前世の殺し殺される様子から、親子ではなかったとみるのが穏当だと思われます。

3 宜保さんの対処

それに対して、宜保愛子さんは次のように述べています。なお、以下の引用で「私」とあるのは宜保愛子さんです。

私は彼女の言っている因果関係は、彼女の夢のとおりだと思いました。

しかし、だからといって、彼女に「あなたはその男の人を殺したために、自分の息子に苦しめられている」と言ったら、どうなるでしょう。これからの彼女の人生に、何も明るいものは見えてきません。

彼女の父親は、たいへんやさしく寛大な人でした。彼女が二十一歳のときに他界していました。

私は彼女に、そのお父さんに対して、家族が幸せになれるように、そして守護霊になっていただけるように、と毎日自分の手でお祈りするようにアドバイスしました。

そのときには、お水とかお茶、そしてお父様の好きだったお酒もそえてお供えし、お願いしてみてください、と言ったのです。

若い頃のお父さんの写真をもっていた彼女は、さっそく、その日から、お父さんに、熱いお茶やお酒をお供えしながら、ただひたすら、親不孝な息子が少しは変わってくれるように、と願ったのです。（298～299ページ）

霊能者だからといって、すべてがわかるわけではありません。鍵穴から除くような映像のこともあるようです。さらに、見えたものをどう解釈するかということも重要です。答えが見えているわ

けではないのです。そして、霊能者だからといって、人格者だとは限りません。霊能者と人格者に相関関係はありません。私たちは、霊能者を人格者と見る傾向がありますが、それは大きな誤りです。霊能者にも、そうでない人と同様、いろいろな人がいるのです。

ついでに言えば、どんなに優れた霊能者でも、未来予知は信用しない方がいいのです。エドガー・ケイシー（1877～1945）さんでさえ、未来予知はあまりあてになりません。未来予知が当たったと言って得意になっている霊能者のアドバイスは無視した方が良くと思います。

私たちは、いろいろな人から学ぶことはあっても、誰かから言われるままに、あるいは何かの規則や経典のままに生きるために生まれてきたものではありません。どのように思い、どのように行動したら、まわりにも自分にもあたたかいかを、その都度自分で考え、それに沿って行動して本当にあたたかいことだったかを確認して進んでいくために、生まれてきています。過度に戒律にしばりつけるような考え方は、成長をもたらしません。霊能者の言うことや戒律のままに行動することは、時に全くあたたかくないこともあるのです。

さて、宜保愛子さんの対処ですが、この母親の長男は、前世でこの母親に殺されたという因果関係は当たっていると思います。念のためにいうと、前世では母親と長男という関係ではなく、夢の内容からは、男性同士であったと考えられます。

4 言わない方が良くこと

宜保愛子さんの対処で何よりすばらしいのは、「あなたはその男の人を殺したために、自分の息子に苦しめられている」とは言わなかったことです。

優しさというレベルの話をしているわけではありません。

前世が見えたとしても、相手の前世の罪を指摘してはいけないのです。

私たちのほとんどが前世を覚えていないのは、不条理の中で学んだ方が身につくということもあるのかもしれません。前世の因縁がすべてわかってしまつては、学びの効果が半減してしまうように思われます。自分に起こることは、前世で自分が他の人にしたことなのですが、なぜ自分はこんなことを他人にされなければならないのかという環境の中で学んだ方が、自分が相手にしてしまったいやなことの本質が身に沁みてわかるというものです。

他の人を傷つけたり、他人に対してあたたかくないことをするのは、人生や生まれ変わりへの理解が足りない証拠です。罪をつぐなうためではなく、私たちはあたたかい方向に向かって進んでいるということを理解するために、この世に学びにきているのです。あの世から見ると、罪や罰はありません。あくまでも、あたたかい方向に行くということを学ぶための教材なのです。罪や罰を強調する宗教は、人生に対する理解の不足している宗教です。

この母親は、宜保愛子さんに相談した時点で、自分は、前世で、現世では長男として生まれてきている人を相当苦しめたということに薄々気づいていたと考えられます。

しかし、前世で人を殺したのだから、この世で苦しむのは仕方ないのだ、というのは、学びとし

ては消極的です。

この母親は、前世では、なぜ人を殺すことに至ったのでしょうか。それははっきりとは書かれていませんが、母親の夢から読み取れるのは、自分が相手に殺されかねないほど追い詰められてやむなく殺したというような状況ではないということです。いずれにしろ、生まれ変わりの観点からすれば、人を殺して解決する問題は、根本的にはありません。

何か価値のないものを価値があるように思い込んでいたり、自分は正しくて相手は間違っているということで殺人を犯してしまうことが多いのではないのでしょうか。

殺人を犯してしまう人の課題は、そのような自分勝手な価値基準をやめることにあると考えられます。

5 先祖の供養は必要でない

さて、宜保愛子さんの対処でやや問題のあった点もあったと思われます。

それは、後半に書かれている、亡きお父さんに守護霊になってもらうというところです。

イエス・キリストさんが、驚くべきことを述べている箇所が聖書にあります。新約聖書のマタイによる福音書の第8章21節から22節です（ルカによる福音書の第9章59節から60節にも同様の話があります）。

ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

これは弟子の覚悟と説明されることもありますが、イエス・キリストさんは弟子だからとか、そうでないとかで差別をするようなことはありませんでした。ここでは、弟子の覚悟ではなく、葬式や先祖の供養はする必要はないということをはっきり言っているのです。

霊能者で、何かすると、先祖の供養をしろなさいという人がいますが、先祖の供養ばかりしている人というのは、自分のことしか考えていないのと同じことです。先祖の供養ばかりしている人と、困っている人のために自分のエネルギーを捧げている人とはどちらがあたたかいかは一目瞭然です。先祖の供養をするよりは、仕事上のいやな役割でもやってみるとか、町内会主催の清掃活動に参加するなどの方が、はるかに学びが大きいのです。先祖の供養をしたおかげで悪い霊がいなくなったというのは、まやかしか、本当のところが見えていないかのどちらかです。

日本では、何かすると、先祖の供養を持ち出します。相談者が、自分のことしか考えられなくなって、他の人を思いやる心を掘り起こすために言うなら、少しは効果があるかもしれませんが、イエスさんが言うように、死んだあとの世界には死んだ人を世話する人がいるのです。死んだ人のことを世話するよりは、生きてまわりにいる人にあたたかくするというのが、生きている人の基本です。

問題がある時というのは、例外なく、自分のことばかり考えている時です。自分のことばかり考えるのはやめて、他の人がしてくれていることに対して感謝ができるようになること、そして他の

人の役に立ったり、他人に感謝してもらえるようなことができるようになった時が、問題が解決される時です。

このように、先祖供養というのは、自分のことばかり考えるのをやめる一つのきっかけにはなるかもしれませんが、あまり良い手段ではありません。

また、お父さんに守護霊になってもらうというのも問題があります。守護霊というのは、自分にほかなりません。守護霊というと何だか、自分の外にあって、気分によって張り付いたりする存在のように思ってしまうような言葉ですが、こうした方があたたかいという声は、どんな人にも聞こえているのです。それは神さまや守護霊ではなく、自分の過去未来の生まれ変わりの中の賢い部分です。それに対して耳をふさいだり、おかしい価値観に囚われて聞こえなくなったりしているだけなのです。

確かに、自分以外のエネルギー体で、応援してくれる存在はありますが、あくまでも自分次第です。酒を飲みたいということばかり考えていると、生前酒ばかり飲みたがっていた存在が集まってきて応援してくれるし、人の役に立ちたいと思えば、人の役に立ちたいと思っている存在が集まって応援してくれます。善悪の判断はありません。類は友を呼ぶのです。

また、「ただひたすら、親不孝な息子が少しは変わってくれるように、と願ったのです。」というのは、大きな問題です。人を変えようとするのは、傲慢というものです。この世に生まれる目的は、人を変えるためではなく、自分が体験し理解するためなのです。

もちろん、この母親の切実な叫びを否定するわけではありません。あまりにひどい人が近くにいる場合、私たちは、この母親のように誰でも思うことでしょう。それもまた学ぶために必要なことなのです。前世で自分もまた、こんな人はいなくなってくれないかな、と思われていたということなのです。それに気づく人は多くないにしろ、自分もそんなふうになりたいという人はほとんどいないでしょう。こんないやな人には絶対なりたくない、この長男のようなことは自分はしたくないと思うのが普通です。これこそが、学びの主眼なのです。

私たちは、自分のことは棚に上げて他人の欠点を指摘しがちです。自分の欠点には気づかないのに、他人の欠点は目につくものです。自分がしたいやなことを他の人が目の前ですと、本当に気分が悪くなります。そこにも、学びの仕組みの巧みさが見え隠れしているのです。

6 一般的な疑問

さて、この話そのものをしたわけではありませんが、人は、自分の人生を選んで生まれてくるという話を授業ですと、それでは、自分の人生は全部決まっているのかという疑問を投げかける学生がいます。

それに対する答えは、決まっているのではなく、自分で決めてきた、というものです。

神さまによって決められた人生を生きているわけではありません。自分の学びに最適な人生を自分で設定して生まれてきたのです。いやいや生かされているのではなく、自分でどうしても学びたく

て生まれてきたのです。

そして、次のような疑問も当然なのかもしれません。

「人は一人で生きているわけではないので、自分の選択通りに全てできるとは思えません」

これは学生が書いたままの文章です。

これに対する答えは、生まれる前の計画は、すべて自分の選択通りになる、というものです。

しかし、おそらく、ここでは、生まれたあとに、自分の選択通りにはならないということを言いたいのではないかと思います。

けれども、生まれてから、この世で思ったことがすべて自分の選択通りに物事が運ぶとしたら、全く学ぶことのない人生になってしまいます。そのような設定をしている人は地球に生まれる意味がありません。

地球に生まれる倍率はかなり高いようです。

私たちは思いをかなえるために生まれてくるのではなく、学ぶために生まれてきているのです。

数多くの生まれ変わりを俯瞰すると、実際は思いはかなっているのです。

例えば、どうしてもイケメンに生まれたいと願えば、次はイケメンに生まれ変わることが出来ます。お金持ちに生まれたければお金持ちとして生まれてくるし、運動能力抜群に生まれたければ、ある程度、それに近い状態で生まれてくるのです。

ところが、イケメンやお金持ちや運動能力抜群の人は、全くいやなこともなく人生が終えられるでしょうか。

どのように生まれ変わっても、そのような、外側から選択可能な事柄と幸不幸は関係がないのです。

確かに、自分の思い通りにならないのは、生きていく上では辛いことです。けれども、思っていることは生まれ変わっていくと実現してしまうので、それは願わない方が良かったということも少なくないのです。

働くのが面倒くさい、働くのがいやだ、と思いつけると、次は失業しやすいように生まれてきます。罰などではなく、自分の思い通りになっているわけですが、仕事がなく幸せだという人はほとんどいません。

私たちの願いや、正しいと思っていることというのは、この程度のことがあまりにも多いのです。

学生が提示した疑問の本音の部分には、相手は自分の思ったとおりに動いてくれないということがあるのかもしれません。しかし、実際は、生まれる前の打ち合わせ通りに演じてくれているのです。そしてそのためには、前世と縁もゆかりもない人と生まれるよりは、前世で影響のあった人同士で近くに生まれる方が、今度は逆の立場になって学び合うということができるわけで、効率が良いのです。この世から見れば、相手は自分の思い通りには動いてくれませんが、生まれる前の会議室からは、全く打ち合わせ通り演じてくれているのです。そのことを理解していると、人生が以前とは違うように見えてくるのではないのでしょうか。

7 学びの仕組み

さて、因果応報とか、結局人生はプラスマイナスゼロだという考え方があります。現象面だけ捉えると、あるいは結果的にみると、それに近いようにこの世は見えるのですが、それは近似値であり、物事の正確なところを捉えてはいません。

つまり、今はいい思いをしていますが、そのうち必ずいやなことが降り掛かるというのではなく、学びのための人生なのだから、適宜、学びの出来事が起こるということです。それでも、ずっと厳しい学びばかりでは大変なので、時に休み時間も設定していることが多いのですが、人によってはある段階に達するまでは頑張り抜くという設定のこともあるでしょう。

神さまが見て各自の幸不幸の釣り合いをとっているのではなく、自分は自分なりの学びを設定しているのです。

先程の、母親と長男の例で言うと、亡き父親の供養をしたから長男が穏やかになったのではなく、この人生では、その時期に一段落するように設定してあったというのが真相だと思います。長男は、前世で、現世では母親になっている人（前世では男性であったようですが）から殺され、復讐の思いをいだいてこの世の人生設計をしてきたために、理屈ではなく、母親を困らせるような行動をとりました。無論、お金や面子に囚われていたとも言えるでしょう。そして、自分を大切にしてくれる人を踏みにじるという行動をしました。次に生まれる時は、この長男は、大切にしている人に踏みにじられるという人生を自分で選択することになるのでしょうか。母親の方は、長男を通して、何かに囚われて、自分のつまらない欲望を遂げるためには、家族を犠牲にしても人を殺してもかまわないと考えることの愚かしさを学んだのです。そんなにまでして遂げたかった欲望は、ろくなものではなかったと気づくのではないのでしょうか。

また、この母親は、困った時に何とか助けようとしてくれた宜保愛子さんのあたたかさを感じたことでしょう。宜保愛子さんは宜保愛子さんなりに、自分の能力に応じて、一生懸命助けようとしたのです。そしてまた、いかがわしい宗教に誘おうとしたのでもありません。先祖の供養ということで人をだます宗教もあるので、アドバイスは必ずしも適切とは言えませんでした。この母親は他に相談できるところもなく、宜保愛子さんに相談したのではないのでしょうか。

困っている人をさらに困らせる手口の悪徳業者や悪徳団体がある中、この母親は、苦しい中でも良い選択をしたと思われます。

私たちは、あたたかいことも学びます。

宜保愛子さんが親身になって相談に乗ってくれたこと、「あなたが前世で今は長男になっている人を殺したのだから、今こんなふうになっているのは仕方がない」と言わなかったことは、この母親が、何回か生まれ変わった後、他の人にしてあげることになるのだと思います。

マザー・テレサさんがしたことは、死にかけた人の場所を移動させて、死ぬのを数日延ばしただけで、根本的に何か役に立ったわけではなかったと批判する人がいるようです。

そういう人はこの世とあの世の学びの仕組みがわかっていない人です。マザー・テレサさんは、

自分のしたことの本当の意味は具体的に言いませんでしたが、マザー・テレサさんのしたことは、将来を見据えた大きく深いものでした。

それは、あたたかい行動をする人をたくさん育てたということです。

マザー・テレサさんやその施設の人たちにあたたかく見守られて亡くなった人は、次に生まれ変わった時に、とにかく人にあたたかくしたいという気持ちで生まれ変わります。自分でも意識していないのに、前世の記憶が染みついているのです。

これに勝る平和教育があるでしょうか。教育というより、もっと奥深いことです。それはキリスト教の布教などというレベルをはるかに超えています。

逆に、爆弾を落として相手を減ぼしても、根本的な解決にはなりません。爆弾を落とされて殺された人の中から、あるいは爆弾を落とされて愛する人を殺された人の中から、一部ではありますが、今度は、自分の方が爆弾を落としてやると思って生まれてくる人が出てきます。

そのような人生の設定の仕方は、レベルが高いとはいえませんが、いろいろなレベルの人がいて学び合っているのがこの世です。

この母親は、殺した相手が自分の長男に生まれてくるということで、他人よりは逃げ場の少ない環境を選択をしました。いろいろなことをこらえて、その苦しみの中から、大切なことを学んだのだと思います。宜保愛子さんの他にも、少しは助けになってくれた人もいるかもしれませんし、公の機関にいる人の中でも、助けになってくれた人もいるかもしれません。

私たちは、気づかないうちに、いろいろな人の世話になっていることを案外気づいていません。電気や水も作れないのに、電気や水が供給されていることが当然と思っている人が多いのではないのでしょうか。私は誰の世話にもなっていないという人がいたら、余程自分のことしか考えられない人だと思われても仕方ありません。

この母親がそこまで気づいたかどうか知りませんが、いろいろな人の世話になっているということに気づくのは大きな一歩と言えるでしょう。

そして、自分も、目立つ目立たないに関係なく、人の役に立つことをしていくということが人生の大きな学びであることに気づくことになるのです。

前世では人を殺してしまったこの母親ですが、この人生で貴重なことを学んだのです。この世では、ただ大変なだけだったと思うかもしれませんが、あの世に行って、ロールプレイングゲームではありませんが、格段に経験値が増えたことに驚くことになることでしょう。